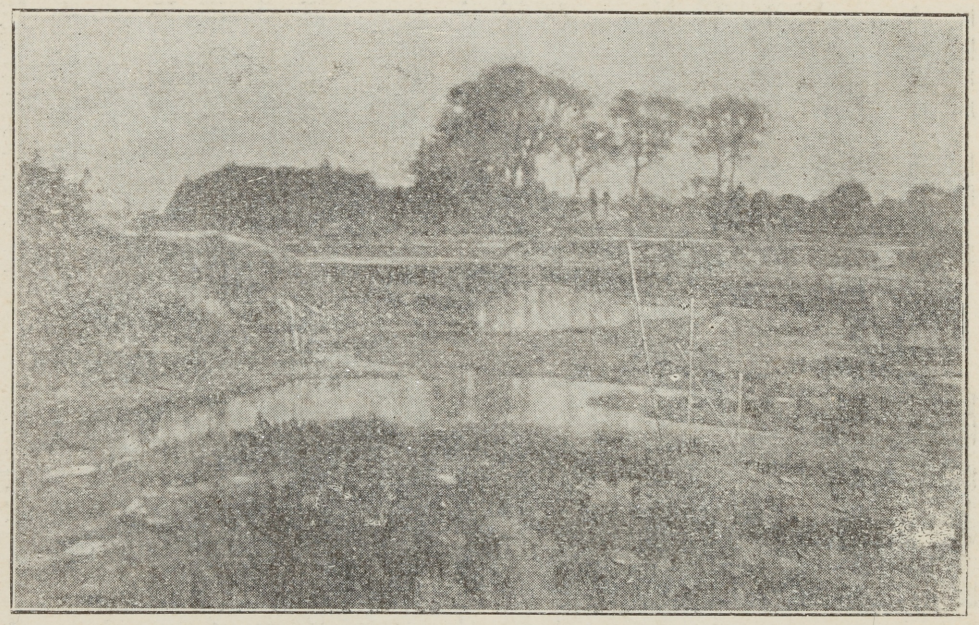
犬に出逢つたら石を投げるのが一番よからう、四ツン這もいゝが人でも見てゐては出來ない藝だ、事急なりと見たら、ヤツパリ僕の力を借りるのさ、三本の樫の棒で撲られたら、キヤツも命にかゝはるからぬ。

房州あたりへゆくと、よく牛が野放しになつてゐる、赤城や上高地にも、牧場があつて牛がノツ〳〵してゐる、平素は何の惡さもしないが、子を連れてゐると、時として人に向つて來るそうだ、コンナ時逃げるとなは追つて來る、コイツを防ぐには、鯱鉾立をするのが一番で、反對に牛の方で逃出すそうだ、併し角兵衛ぢやあるまいし、誰れでも鯱鉾立が出來るとは限らない、それで第二策としては、イキナリ座つて仕舞つて、砂をつかんで牛の顏を見がけて投げるンだ、牛といふ奴は頗る眼を大切にするから、ホントーの砂がなくとも、手つき丈けでも降參して仕舞ふといふことだ。遊獵攻擊の彈丸が飛ンだ方に外れちやつた、此次は何か別の面白いお話をしやう。



春の川邊　　河合新藏筆

肉筆に到つては曾て一度も觀たることなしといふ人少なから

靜岡の一夜

大下藤次郎

△靜岡に比奈地畔川氏あり、小山枯柴氏と相圖りその地に水彩畫展覽會を催しては如何との相談をうく。

△美術趣味の普及は、品性修養の上に、工藝製作の上に、直接間接幾多の利益あり、殊に將來の國畫たるべく運命を荷へる水彩畫の普及は余の最も希望する處たり。

△曾て水彩畫の手引を出版せしもこれが爲めなり、雜誌『みづゑ』を發行しつゝあるもこれが爲めなり、研究所の設けられしもこれが爲めなり、屢々講習會を開きしもこれが爲めなり。

△水彩畫の趣味を普及すべく、文字に言語に將た版畫に、出來るだけの手段を取れり、しかも百聞は一見に如かず、地方によりては、たゞ不完全なる製版の技を透して、水彩畫とは如何なるものかを朧ろ氣に知れるのみ、專門家の

ず。

△故に水彩畫の多數を携へて、各地に巡廻展覽會を催ふし、直接製作の味はしめ、徐々に此趣味の普及を圖らむとは、余が豫てよりの願ひなり。

△奈志地氏の提案は余の願ひと合せり。書信を交ゆること兩三回、やがて志奈地氏來り繪畫を集む、丸山氏信州に在り、河合氏大阪に在り、開會の期日せまり遠きより其作を集むることかたく、僅かに研究所有志、並びに余及ひ余が門下兩三氏の作を以てこれに應ぜり。

△總數二百八十餘點、新にマツトを求め、準備繁忙を極む、これが爲め二月二十五日の夜は、作業實に十二時を過ぎたり。

△會は三月二日より五日間、靜岡市舊城内物産陳列場に於て開かるゝ筈なり、余は陳列の有樣を一覽すべく、三月一日朝急行列車にて靜岡に向ふ。

△列車内に入つて先づ不快を感ずるは、何れの座席も、客あらざるに既に赤帽によつて、毛布羽蒲團の類を敷詰られ、一席をも剩さゞる其横着なる手段なり、ラグを持たず赤帽を煩はさゞる余は、濕鑵車に近き一室に於て、恐る〳〵毛布の一隅をよけて席を得たり。

△四人を座せしむべき席は、荷物と共に一人若くは二人によつて占領せられ、平沼よりの乘客をして居るに處なからしむ、しかも數島袋を行列せしめ、車内通行の妨害を敢てし顧みざるは、かゝる横着の客に多きは勿論なり。

△國府津を過ぐ、去歲この頃、屢々三脚を据へたる松下の濱、屋後の畑、見るもなつかし。遠く箱根連山には白雪斑々たり。

△車中『史劇十二曲』をよむ、久しき以前著者山崎氏より寄せられしもの、當時卒讀深く味ふに及ばず、こゝに會心の作二三を再讀することを得たり、脚色の巧臺詞の奇警は他に或は其人あらん、場面をしてよく繪畫的に統一あらしむるその技倆は、この作者を以て、余は當代第一と推すを憚らず。

△富士の雪は多し、足柄連峯また白點々。

△午を過ぐること三十分靜岡に下車す、小山比奈地兩氏プラトホームにあり、大東館に入り會の模樣をきく。

△警察の干渉、會場の變更、其他種々の手違を生ぜしも、幸に商業會議所の會頭伏見氏の厚意と同情とにより、物産陳列場前なる水産組合の新築建物全部を借受け、現に陳列中にして、後刻知事及この地の名譽職其他の來觀ある筈なりといふ。

△共に會場に向ふ、便利にして閑靜なる地にある建物は、坪數四十餘、階上階下四室を以て陳列の場に充てられたり、新築以來今回初めて使用さるゝもの、光榮と云ふべし。

△商業會議所樓上に於て、會頭伏見氏に逢ふ、快活にしてよく語らる、此地の漆器は世に名あるもの、しかも其圖案模樣等の意匠に於て、千篇一律新意の見るべきものなし、水彩畫の展覽會は、かゝる方面に對しても少なからぬ効果を齎らすべしとて、此事業に深く賛成の意を表せらる。

△德川慶喜公は、アマチユアとして水彩畫に筆を執りし最初の

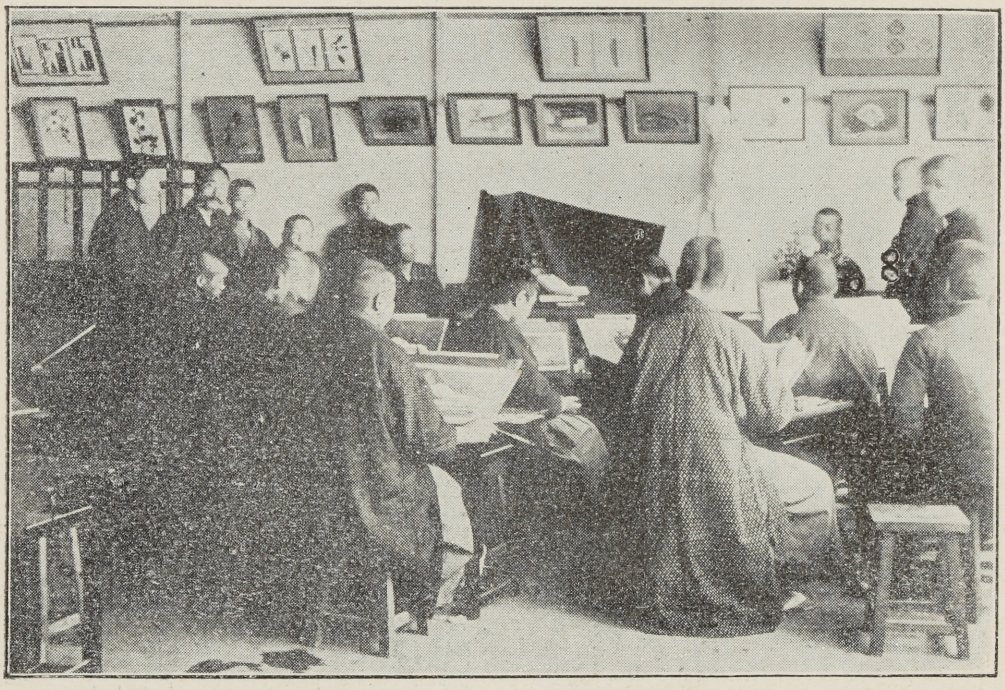
人なりしならん、余は今より二十年以前に於て、其庭園を寫せる公の小品を見たり、此ハイカラなる貴人と因緣渉からざる靜岡に於て、地方に於ける最初の水彩畫展覽會の開かるゝといふことは、偶然にはあらざるべしと余は思へり。

△會場にては同人おさ〳〵陳列に忙し、鐵線を伸ぶるもの、繪を懸けるもの、畫題を貼付するもの、頗る混雜を極む。

△夕刻大東館に歸る。室廣く且清く、待女敏捷にして待遇また可なり。

△二日空晴れたり。朝、比奈地氏來り共に會場へゆく、設備全く成り、採光の工合も惡しからず、何よりも陳列場の新しきは快よし。

△定刻に至るや、參觀人踵を接して來る、多くは初めて新樣の畫に接せしもの、熟視佇個容易に去らざるものあり、匆々にして場を出るものあり、學生風にあらざる妙齡の一女子、一枚々々熟視して久しく動かざる其熱心は異とすべし。



日本水彩畫會飯山支部研究會

△畔川氏の家にて午餐の饗をうく、遠州森町の名物『梅ごろも』極めて美なり、由來名物に旨いものなしといふ、されどそは名所の名物を指すべく、隱れたる地に於ける名物には猶美味なるもの少なからざるべし。

△午後よりは、學校歸りの師範中學等の學生の參觀多し、會場新しく持主の要求によりて一々脫靴せしめしは甚だ氣の毒の思ありき。

△場に入るの人まづ帽を脫す、陳列の繪に對するも絕えず帽を手にす、米國に於て、美術館又は展覽會に入るの士人は必ず脫帽す、しかも巴里に於て、ロンドンに於て、また東京に於ては必ずしも然らず、余は靜岡人士の此床しき態度に善感を覺えたり。

△四時二十九分、新橋行最急行に投じて靜岡を去る。

△七時、國府津のほとりにて食堂車に入る、給仕遲鈍容易に用を便せず、相對座せる一紳士は、余のために給仕を叱すること再三、辛ふ

じて食をとることを得たり、旅客に對する鐵道院の注意監督、甚だ不充分なるは遺憾ならずとせず。(完)

春鳥畫談

汀鷗

大膽にして細心なれ

有樂座の東西名人會に往つた。出席名人連の技藝は敬服すべきものであつた、舞臺の上に假屋を設け、金襖やら衝立やら、裝飾も立派で、太夫もかゝる處に居て演じてこそ、自尊心も起らう張合も出やう、誠に結構なことであるが、演者の背後の金襖の大きな曳手の取附けが、上下に二寸程も狂つてゐた、表面長押の釘隱しは二つばかり取れてゐた。

曾て京の祇園で都踊を見た。舞子の美しいは勿論の事、背景もまた美事であつて觀者を恍惚たらしめた、やがて一群の舞妓が表面の階段を登つてゆく時、不圖見ると、何れも其足袋の裏は眞黑であつたので、切角のイリユージョンは忽ち破られた。襖の曳手の狂ひや、釘隱しの破損、足袋の裏の汚れなどは實に些細なことであらう、藝術に醉ふ多くの人には恐らく氣もつくまい、乍併、世には比較的冷やかな態度を以て藝術に對する人も少なくはない、深甚なる注意は、繪の上に於ても殊に大切である、一の斑點もよくその畫の死命を制することがある、美しければ美しい調和、穢なければ穢なく調和してゐなければいけぬ、藝術家は宜しく大膽なれ、しかも同時に細心なれ。

ほど

『あの方は程がいゝ』とは一部の社會でよく言ふことだ、『程』とは中庸をさすので『程のいゝ』といふことは繪の上にも肝要だ。近頃は、モツト突込んで強く描けの、深刻の印象がなくてはいけぬの、辛辣であれのといふ註文もないではないが、それは別問題として、この『程』といふことを無視した出來損ひの繪を見ることが少なくはない。『描き足らない』といふ繪は、『描き過ぎた』といふ繪と共に『程』のよくないことだ。『程』のいゝ繪は、いつ見ても氣持がよい。展覽會場などでは、時に或は見世物の看板のやうな強烈な繪に蹴落されるかも知れないが、それは一時の事だ。

専門家と素人

専門家は畫面の要點に注意して骨を折る。素人は不必要の處を一生懸命にやつて、要點は忘れてゐる。

専門家はパレットの上の十色の繪具を百千万にも變化させて使ふ。素人は十色の繪具を使つて、僅かに二三の異つた色を出す。

専門家は細部を捨てゝ置いて先づ大體に注意する。素人は一部分に苦心して大體を忘れてゐる。

専門家は頭で繪をかく。素人は手で繪をかく。

＊　＊　＊　＊　＊